

CONTENTS

- 特集・1
映像作家・松本俊夫
- 特集・2
映画前史-映画はいかにして誕生したか
- 作品介绍

IMAGE LIBRARY NEWS

●●イメージライブラリー・ニュース 2000年6月 第4号●●

イメージライブラリー・ニュースは4月・6月・9月・11月に発行の映像に関するミニ情報誌です。バックナンバーについては館内の受付カウンターにご相談下さい。

略歴(作品歴)

- 1932 名古屋に生まれる。
- 1955 東京大学文学部美学美術史学科卒業
- 1956 『銀輪』
- 1958 「前衛記録映画論」を発表
- 1958
- ～1959 月刊誌「映画批評」編集委員
- 1959 『春を呼ぶ子ら』『安保条約』
- 1960 『白い長い線の記録』
- 1961 『西陣』
- 1962 『傷だらけの夜』
- 1963 『石の詩』『閉ざされた朝』
- 1964 『嘘もほとんど裏からみれば』
- 1966 機関誌「映像芸術」編集長
- 1967 『母たち』草月実験映画祭審査委員
- 1968 『つぶれかかった右眼のために』
『マグネチック・スクランブル』
日本アート・シアター・ギルド
- ～1970 (ATG) 作品選定委員
大阪万博せんい館総合ディレクター
- ～1972 映画理論誌「FILM」編集委員
- 1969 『エクスタシス』『薔薇の葬列』
- 1970 『スペース・プロジェクション・AKO』
- 1971 『修羅』『メタスタシス(新陳代謝)』
- 1972 『エクスパンション(拡張)』
- 1973 『モナ・リザ』『十六歳の戦争』
- 1973
- ～1974 月刊誌「芸術倶楽部」編集委員
- 1974 『アンディ・ウォーホル=複々製』
日本映像学会理事。
- 1975 『青女』『色即是空』『アートマン』
- 1976 『麻』『ユーテラス(子宮)』
- 1977 『ブラックホール』
- 1978 『エニグマ』
- 1979 『ホワイトホール』『水族館』
- 1979～ びあフィルム・フェスティバル審査委員
- 1980 『気=BREATHING』
- 1981 『コネクション』
- 1982 『リレーション(関係)』
『シフト(断層)』
- 1983 『フォーメーション(形成)』
- 1984 『ディレイ・エクスポージャー』
- 1985 『スウェイ(揺らぎ)』
- 1986 『マルチ・コネクション』
- 1987 『エングラム(記憶痕跡)』
- 1988 『ドグラ・マグラ』
- 1989 『ルミナス・グローブ』
- 1990 『ウランド伝説』『氣配』
- 1992 『ナラトロジーの罫』
『ディシミュレーション』

その他、劇映画・ドキュメンタリー・実験映画・ビデオ・インスタレーション・CM・舞台など100本余り。

著作

- 『映像の発見』三一書房 1963年
- 『表現の世界』三一書房 1967年
- 『映画の変革』三一書房 1972年
- 『幻視の美学』フィルムアート社 1976年
- 『映像の探究』三一書房 1991年

もともと画家になりたかったという松本氏は、東京大学の医学コースから美学美術史科へ移って、芸術の理論と歴史を学んだ。そこで20年代ヨーロッパのアバンギャルド映画の存在を知ることとなる。それはパリを中心に、サルバトル・ダリやフェルナン・レジェエなど当時の美術家が積極的に映画と関わって生まれた、全く新しい形の映画であった。そしてまた同時に日本に入ってきたイタリアン・リアリズムの、現実を直視した表現方法に強い刺激を受ける。これはのちに松本氏が展開したアバンギャルドとドキュメンタリーの統一を目指した「前衛記録映画論」(58年)の礎となっている。卒業し、映画会社に入り映像制作の勉強をしながら最初の作品『銀輪』(56年)を制作する。これは当時まだ無名だった武満徹、山口勝弘と共同で作ったもので、日本の実験映画の先駆的な作品である。「西陣」(61年)では、織物で有名な西陣の説明的な描写を意識的に排除して、目には見えない内

面のリアリティを表現。ベネツィア国際記録映画祭で銀獅子賞を獲得した。67年には「母たち」で同映画祭の金獅子(グランプリ)を受賞した。また、メディアやテクノロジの面でも、まだ目新しかったビデオをいち早く取り入れた「マグネチック・スクランブル」(68年)を制作。「アートマン」(75年)では赤外線フィルムによる不可思議な色と、複雑に構成された軌道上(図1)をカメラが動き廻ることで特異な視覚効果を生み出すなど、新しいメディアの導入や映像形式を追求した作品は、その後の実験映画やビデオアートの分野にも影響を与えた。そして劇映画も4本監督している。昨年リバイバル上映された話題を呼んだ『薔薇の葬列』(69年)は、当時まだタブーとされていたゲイボーイを中心に(主役のピーターはこれがデビュー作である)エディプス神話を60年代の新宿を舞台に置き換えて描いた異色作である。評論家としては、雑誌「記録映画」「映画芸術」「FILM」などで先「前衛記録映画論」を始めとして、常に意欲的に発表してきた。その、芸術や映像を根柢から揺さぶるラディカルな理論はしばしば論争にも発展し、後に大島渚など松

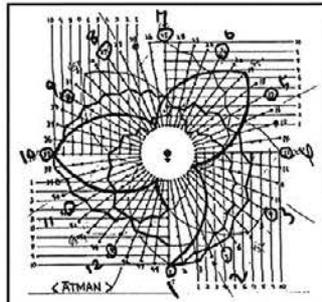


図-1 『アートマン』のカメラ位置

特集1
映像作家・松本俊夫

日本の映画・前衛的な映像芸術におけるパイオニアで、今も精力的に活動を続ける松本俊夫。その多才な表現・執筆活動を紹介しします。



竹ヌーベルバーグの作家たちが積極的に発言・論争に参加するようになった。また、優れた教育者でもある松本氏は、これまでに東京造形大学、九州芸術工科大学、京都芸術短期大学、京都造形芸術大学などで教鞭を取り、そこから伊藤高志や森下明彦など多くの作家が輩出された。またびあフィルムフェスティバルの審査委員を務めた際に、黒坂圭太(本学映像学科助教授)の才能を見抜き、京都芸術短期大学に呼寄せた。また、松本氏の訪れた地方では、大学のみならずその周辺で作家同士の交流や上映会が活発化したなど、今まで東京にはかり集中していたネットワークを地方と結びつける事にも大きく貢献した。このように日本の映像芸術の黎明期から、百本にも及ぶ作品や執筆、作家の育成と、常に時代の先を立ちリードしてきた松本俊夫の全貌を語るのには容易ではない。そこで今回の課外講座に松本氏を招き、作品の上映と貴重なお話を伺うことになっている。(狩野 志歩)

第10回課外講座 6月26日(月)
講師：松本俊夫
詳しくはポスター・チラシをご覧ください。

また、優れた教育者でもある松本氏は、これまでに東京造形大学、九州芸術工科大学、京都芸術短期大学、京都造形芸術大学などで教鞭を取り、そこから伊藤高志や森下明彦など多くの作家が輩出された。またびあフィルムフェスティバルの審査委員を務めた際に、黒坂圭太(本学映像学科助教授)の才能を見抜き、京都芸術短期大学に呼寄せた。また、松本氏の訪れた地方では、大学のみならずその周辺で作家同士の交流や上映会が活発化したなど、今まで東京にはかり集中していたネットワークを地方と結びつける事にも大きく貢献した。このように日本の映像芸術の黎明期から、百本にも及ぶ作品や執筆、作家の育成と、常に時代の先を立ちリードしてきた松本俊夫の全貌を語るのには容易ではない。そこで今回の課外講座に松本氏を招き、作品の上映と貴重なお話を伺うことになっている。(狩野 志歩)



『薔薇の葬列』

私たちが日常的に見ているテレビ、ビデオ、映画などの映像は、およそ100年前に誕生した「映画」に端を発しています。映画はコマ撮りされたボジフィルムに強い光をあて、1コマづつ間歇的(かんけつてき)に投影することで、現実の風景を再現する空間と動きを兼ね備えた光学的なメディアです。初めて映画が一般公開されたのは1895年のパリでした。それ以前、多くの錬金術師や見せ物小屋の主は、幻燈や幻劇(ファンタスマゴリア)と呼ばれる数々の単純なしかけを使って、どうにかして動く絵や空間を手に入れようと模索しました。一方では多くの研究者によって、科学的、技術的な研究がなされました。

人間が「映画」という新しい表現手段を手に入れるまで、つまり映画前史を紐解くことは、今日の映像原理を知る手立てとなります。では、どのようにして映画が誕生したのでしょうか。

その1 残像効果の研究

まず、映画前史の第一歩を形作るのは、人間の眼の残像効果に関する研究でした。すでに古代ローマ時代、網膜上の残像効果に関する研究が行われていましたが、それらの研究はまだ漠然とした内容でした。17世紀末にはニュートンが科学的基礎の下、光の白色合成に関する研究を行いました。

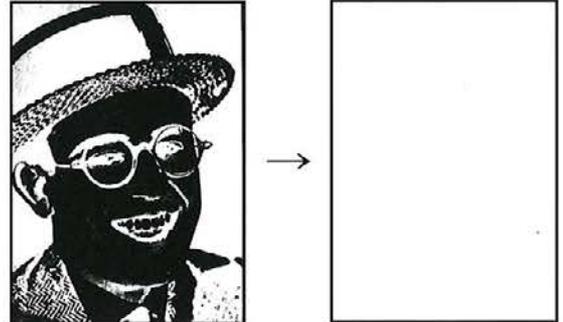
さらに19世紀初頭にはゲーテは『色彩論』の「眼に対する光と闇の関係」「眼に対する黒と白の関係」の中で科学的な観察を通じて、残像現象について書き記しました。

「ゲーテ全集 14 色彩論」より

「われわれがこれらの状態の一方から他方へ急速に移行するならば、たとえ極限から極限へではなく、明るいところから薄暗いところへ行くにすぎないような場合でも、その差異は著しくわれわれはこれらの状態がしばらくの間は持続することを認める」

「(中略) われわれは一つの対象から他の対象に視線を移し、像と像の継起は截然として見えているように見える。しかしわれわれは、先行する像のなごりが、後続する像の中へ忍び込んでいることに気がつかないのである。」

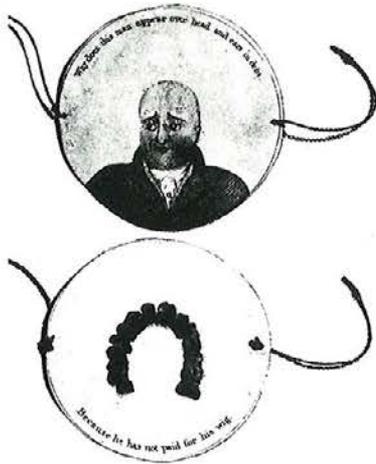
「明方の空を背景にした窓の十字架の棧を、朝の目ざめのとき、眼が特に感じやすくなっているうちにじっと見つめて、それから眼を閉じるか真暗な場所のほうを見やると、明るい素地の上に黒い十字の棧が写かっているのがおしほらく見えるであろう。」



(図-1) 写真の1点を30秒ほどじっと見つめた後、右の空白を見て下さい。残像はみえましたか?

ハロルド・ロイド

(図-2) ソーマトロープの表と裏

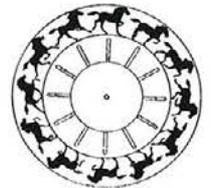


その2 残像効果を利用した玩具

1825年、ウィリアム・ヘンリー・フィントンとジョン・エアトン・パリス医師はソーマトロープという子供用玩具をつくりました。(図-2)

ソーマトロープと呼ばれるこの玩具は、ボール紙の表と裏に描かれた異なった絵が、それに付けられた紐のねじれを利用した素早い回転によって、2つの絵が合わさり1つの絵として見ることができます。

これらの理論を下に、残像現象をより具体的に研究したのが、ベルギーの学者ジョセフ・プラトーでした。彼はまず、真昼の太陽を25秒間直視し、人間の目の網膜の抵抗力についての実験を行いました。その後、しばらく盲目状態になった彼の網膜には、目を閉じると彼が見ていた太陽の像が残っていました。また「花火はその効果の一部を残像効果に負っている」という視覚の実験をくり返し、1828年には網膜上の残像時間の長さを3分の1秒であると明らかにしました。さらに彼は、「回転する像を歯状のスリットを通してみたととき、それは静止してみえる」という観察をまとめ、これら5年間の研究の結果として1832年にフェナキスティスコープという玩具を発明しました。



(図-3) フェナキスティスコープ

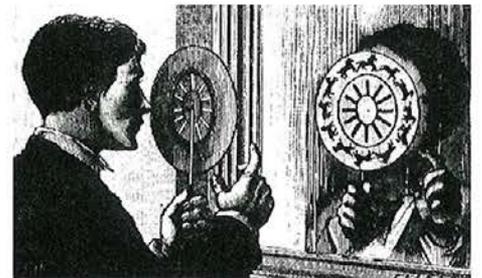
フェナキスティスコープという装置は、基本的には一枚のボール紙の円から成っています。(図-3) 円板には一定数の小さな隙間が中心から外側に向かって開けられ、その一方の面には挿絵が描かれています。鏡に向かい合って円板を回転させると、その隙間ごとに片目で眺めたとき、鏡に映って見える挿絵は、混ざり合ってしまうわずに、挿絵が動いているように見えるのです。つまり、装置に描かれた絵は混ざり合わずに挿絵の間で結ばれるようになり、私たちは形と位置とが少しずつ変化していく一つの絵の運動を見ていると思うようになります。(図-4) は鏡の前でフェナキスティスコープを使っている様子です。

太陽を直視するなどの無謀ともいえる実験をくり返し、後に彼は失明してしまいました。

プラトーとほぼ同時代にウィーンではシュタンプファーがフェナキスティスコープと同類の玩具を考案し、それはストロボスコープと呼ばれました。

1834年にはホーナーがフェナキスティスコープを改良したゾーイトロープ(図-5)を考案しました。円盤状のフェナキスティスコープでは24個以上の絵を描くことができませんでしたが、この装置では円筒の内側に描かれた帯状の絵は50個ほど描くことができるようになりました。これは後のフィルムの形を予見させるものとなります。

しかし、これらは描かれた絵の反復した動きにすぎず、映画の誕生には、現実の像を定着する「写真」発明を待つ必要がありました。



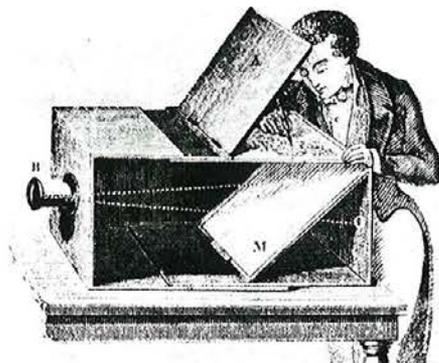
(図-4) フェナキスティスコープの使い方



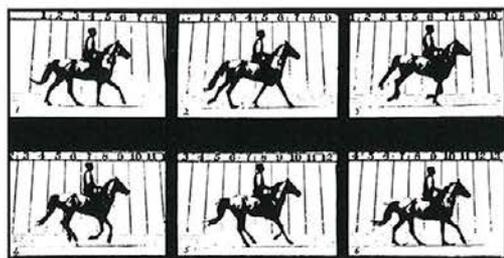
(図-5) ゾーイトロープ



ラテン語で「暗い部屋」を意味する**カメラ・オブスクーラ**の原理については、レオナルド・ダ・ヴィンチも探究心を傾け記述を残しています。それは暗室の鏡戸に開けられた小さな穴が、向かい側の内壁に外の風景の逆立像を結ぶもので、17世紀末から18世紀にかけて、レンズを用いた携帯用の暗箱へと実用化された**カメラ・オブスクーラ**(図-6)を、画家たちは写生のために利用していました。写真の撮影機の前駆といえる暗箱の普及はその中に映し出される像を永久的に記録したいという願望を人々にもたらし、数々の模索の中、ジョセフ・ニセフォール・ニエプスとルイ・ジャック・マンデ・ダゲールが、銀塩が光に当たると黒く変色する特性を利用し、銀めっきした銅板上に鮮やかな像を定着させることに成功します。この**ダゲレオタイプ**は、ダゲレオタイプ・マニアと言う言葉を生んだほど当時の人々を熱狂させました。また、1841年、科学者ヘンリー・フォックス・タルボットが写真の歴史の中で重要な貢献をします。**カロタイプ(トールポタイプ)**と呼ばれる彼の写真術は、ネガから多数のプリントを得ることが可能でした。後に写真から発展していく映画が複製可能性によって世界に波及していったことを考えると、その功績は大きいものです。



(図-6) カメラ・オブスクーラ



(図-7) 1878年頃のマイブリッジの写真

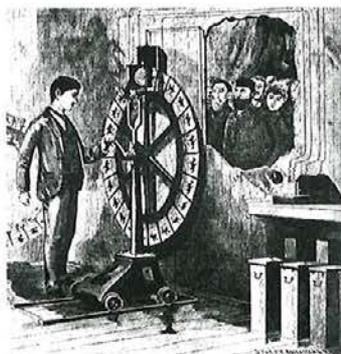
その4 動く写真

しかし、このような1枚の写真から映画へと発展するためには、1つの動きを瞬間写真で連続的に撮影するという段階を経る必要があります。その動く写真の歴史に大きな躍進をもたらした一人がエドワード・マイブリッジでした。1878年、彼は馬場に12台のカメラを並べ、疾走する馬がカメラに連動した糸を通過することでシャッターを切り撮影する、という実験をし、一連の運動の分解写真(図-7)を得ることに成功します。マイブリッジが撮影した写真を基に回転ガラス円板にデッサンが描かれた**幻燈ゾーアブラクシス**

コープは、スクリーン上に疾駆する馬の運動を見事に再現しました。しかし彼の研究は人間や動物の動きにのみ終始し、彼のカメラの前で練り歩いた多くの裸婦たちの姿は、図版として出版されるに留まったのです。

飛翔する鳥の運動に関心を抱いていた生理学者、エティエンヌ・ジュール・マレイは、マイブリッジの実験にインスピレーションを得て、1882年従来からあるリヴォルヴァー式写真機を改良し、**写真銃**(図-8)を製作します。1枚の乾板に12コマの瞬間写真を重ねて撮影することのできる写真銃は、最初の手持ち撮影機です。

また、ドイツのオットマル・アンシュッツはシャープで鮮明な写真プリントに成功し、連続写真をもとの動きに再構築するために、投影機**シュネルゼーアー**(schnell/速い、seher/見るもの)(**タキスコープ**)を開発、後に**電気式シュネルゼーアー**(図-9)に改良します。この発明は1893年のシカゴ万博でも展示され、映写式の映画の実験の刺激となります。



(図-8) 写真銃

(図-9) 電気式シュネルゼーアー

■参考文献■

- ・世界映画全史 1、2
ジョルジュ・サドゥール著/国書刊行会
- ・映画の考古学
C・W・ツェーラム著/フィルムアート社
- ・映画の教科書
ジェームズ・モナコ著/フィルムアート社
- ・観察者の系譜
ジョンサン・クレーリー著/十月社
- ・ゲーテ全集 14
ゲーテ著/潮出版社
- ・複製技術の時代における芸術作品
ヴァルター・ベンヤミン著/
岩波書店「ボードレール」収録
- ・FILM NO.13
フィルムアート社

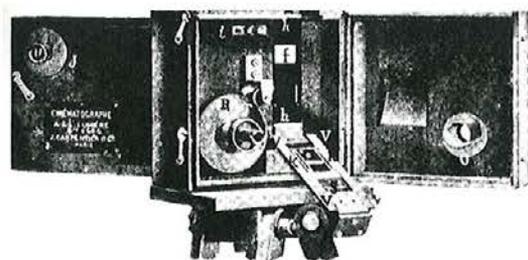
■参考ビデオ■

- ・フィルム・ビフォー・フィルム
監督:ヴェルナー・ネクス
- ・不思議な映像実験室
こどもの城AV事業部製作
- ・課外授業 ようこそ先輩
バラバラ漫画がアートになった!!
出演:岩井俊雄

その5 映画への胎動

こうして映像玩具の発展とともに培われてきた映写技術と、写真の発明から試みられた撮影技術とがようやく肩を並べようとしていました。アメリカでは、トマス・エディソンが、彼が既に開発していた蓄音機に、ジョージ・イーストマンが開発した帯状のセルロイド・フィルムを採用します。音や言葉を記録する蓄音機の改良として映像を結び付けようとしたのです。しかし、その最初の撮影機を実際に開発したのは、彼の協力者、ウィリアム・ケネディ・ローリー・ディクソンでした。1891年、キネトグラフ(撮影機)、キネトスコープ(フィルムが内部で廻るのを覗き見る鑑賞装置)が特許申請されます。また、この段階で、フィルム幅を35ミリ、画面の縦横比率を1:1.33、フィルムをスムーズに動かすための送り穴・パーフォレーションを1コマにつき4対とする、現在まで続くスタンダードが決定されたのです。

そして1895年、フランスでリュミエール兄弟が**シネマトグラフ**(図-10、kinema/動き、graphein/描く)を発明し、世界最初の映画『リュミエール工場の出口』を公開します。それはエディソンが解決し得なかったフィルムを映写するという重大な要素を克服した、撮影機と映写機とを兼ねた装置でした。その年の12月にはバリのグラン・カフェで一般公開が行われ、興行という上映の形態が生まれました。19世紀の科学技術の集積であり、リュミエール兄弟が科学的な課題とみなしていたシネマトグラフは、メディアとして確立すると同時に発明家たちの手を離れ、娯楽や芸術としての膨らみを増しながら、現代に引き継がれて行くことになるのです。



(図-10) シネマトグラフ

「M」

1931年 ドイツ 99分
監督/フリッツ・ラング
俳優/ピーター・ローレ 他

とにかく怖い事件が多い昨今。事実は小説より奇なりと言わんばかりに、不可解で無惨なニュースがTVを席卷している。世紀末、世も末という言葉でこうしたことが片づけられると思っていたら、いやそうでもない。いつの時代にも何らかの社会不安、不遇な生活環境から、ズレやバグが生じて犯罪者が生まれるようだ。

フリッツ・ラングは当時のドイツ中を震撼させた二つの実際の事件をモチーフにこの「M」を作ったとされる。肉屋のハールマン事件とデュッセルドルフの吸血鬼と呼ばれる大量殺人事件（「ピーター・キュルテンの記録」という題で手塚治虫の漫画にもなっている）がそれだ。

物語は幼女連続殺人事件の犯人を警察が捜査してゆくなか、その結果取り締まりが厳しくなった窃盗集団も、何とか殺人犯を突き止めて裁いてしまおうとするのだが、30年代作品というだけで少しナメていた自分が恥ずかしくなるほど、しっかりとした作りで、ただの犯罪モノではない、現在のサイコサスペンス映画の祖ともいえる内容となっている。イヤ、ほんと。

オープニングはグリークの「山の魔王の宮殿にて」が妖しげに流れてゆき、それが殺人犯の口笛のメロディと繋がってゆくあたり、かなり音が重要な要素になっている。聞けばラングの初のトーキー作品で、今見ると音や音楽が過剰に入ってきていないだけに、サイレントの部分とそうでない部分の対比が全体的に緊張感を与え、ラングが試行錯誤しながらも嬉々として絵に音をつけたのではないかと感じられる入れ込みようだ。

口笛が犯人の存在感としてのサウンドサインとなっており、同じ行動を無意識に繰り返してしまう犯人の神経質的な部分も表現して、ひいてはそれが盲目的風船売りに気づかれるという非常に凝った構造になっている。劇中で描かれる警察の捜査方法などはかなり強引なものがあるが、殺人犯役を演じるピーター・ローレのいった演技、また連続殺人というテーマを扱ってはいるが、実際に残酷なシーンを見せることなく観る者に伝える表現手段は特筆に値し、かなり大人な映画であるといえる。

この後ドイツは本当に狂喜の時代に入り、ラングはアメリカへ渡るためこれがドイツでの最後の作品となるので、一つの基点としても興味が尽きない。

ラスト殺人犯が自分の犯した罪への衝動を告白するシーンの直後に「今日の教訓」的な言葉が流れるが、その時代のヤバさと、映画にそういう役割もあるのかと、ギクッとさせられた。どういう言葉かは観てのお楽しみ。
(映像学科・助手 瀧健太郎)



編集委員 板屋 緑一 映像学科 教授
下川久美香 狩野 志歩
木村美佐子 田中友紀子

イメージライブラリー・ニュース 第4号 2000年6月発行
武蔵野美術大学 イメージライブラリー
〒187-8505 東京都小平市小川町1-736
TEL/FAX 042-342-6072
禁無断複製・転載



「空飛ぶモンティ・パイソン」

例えば、の話。

公共放送であるNHKが「天皇賞レース」と題して、千代田区におわします方々の走り回る映像をギャグとして放送したらどうなるか。

間違い無く、日本刀を持って軍服を着た人が街宣車に乗ってやってくる。

同じくNHKの番組内で「本日の放送は陛下が御覧になっておいでです」という台詞の後、日本国旅券に描かれているあのマークを、巨大な足が踏みつぶしたらどうなるか。

間違い無く、日本刀、軍服、街宣車である。

そういったタブーに属する事さえも、60年代から70年代にかけて、英国の公共放送BBCを舞台に平気で笑いのネタにしていたのが、5人の英国人と1人の米国人からなるコメディグループ「モンティ・パイソン」である。ほとんどがケンブリッジかオックスフォード出身のエリートで、なかには弁護士や医師の資格を持つものさえいる。このチームは、自分達自身が属する社会のあらゆる要素 - 大衆、王族、政治家、警官、軍人、ゲイ、移民、貧困、娯楽、差別、偏見、戦争、宗教、歴史、など - を笑いのめした。冒頭の例え話はすべて、日本に置き換えてあるだけで実在のスケッチ（コント）なのである。

日本刀、軍服、街宣車とまでは行かなくとも、相当なクレームは来たようだが、彼等はそれさえもギャグにしてしまう。軍隊をゲイの巣窟のような描き方をしたスケッチに対して、完全にオネエ口調の抗議文が届いたりインタビューに答えてBBC批判をする人が「左翼の温床」などといって余計にその保守的体質を露にしたり。

知的で社会派の笑いだけじゃなく、純粹のパカも合わせ持つところがモンティ・パイソンの魅力である。「脳が痛い!」とあって病院にやってくるガンビー氏や、アリクイとライオンを混同したまま調教師になろうとするビューティ氏、「平たかないカレイを買ったので、魚を飼う許可証を発行してくれ」と窓口の役人に絡むブライン氏。彼等が自作自演するキャラクターたちは、本当にどうしようもなく、バカで、どこか愛らしい。そしてスケッチとスケッチの間には、今や大監督となったテリー・ギリアムが、自宅の屋根裏部屋で作っていたという切り絵アニメが入る。これがまた天才の業というか、狂気の沙汰というか。

TVシリーズの他にも4本の映画がある。どれも傑作ぞろいなのだが、その内容は自分の目で確かめてみてください。

「笑われる」という一点において、世界はモンティ・パイソンの前で平等である。

(視覚伝達デザイン学科・助手 夏川憲介)

ライブラリーにあるモンティ・パイソンのソフト

「空飛ぶモンティ・パイソン1~11」VHS
「モンティ・パイソン 人生狂騒曲」VHS
「モンティ・パイソン ライフ・オブ・ブライアン」VHS

作品介绍

シネマ 将軍